

岐阜県恵那市大井町における生活領域と 景観資源に関する研究 —土々ヶ根・岡瀬沢地区を対象として—

井出 純一¹・横内 憲久²・岡田 智秀³

¹学生会員 日本大学大学院 理工学研究科不動産科学専攻（〒274-8501千葉県船橋市習志野台7-24-1）

E-mail:idejun9012@yahoo.co.jp

²正会員 日本大学教授 理工学部まちづくり工学科（〒101-8308東京都千代田区神田駿河台1-8-14）

E-mail:yokouchi@arch.cst.nihon-u.ac.jp

³正会員 日本大学教授 理工学部まちづくり工学科（〒274-8501千葉県船橋市習志野台7-24-1）

E-mail:okada.tomohide@nihon-u.ac.jp

岐阜県恵那市の北部に位置する大井町では、恵那市景観計画（2012年3月策定）の方針にある地域別景観計画の策定に向け、現在筆者らの参画のもと、景観まちづくり活動を進めている。特にこの大井町を構成する土々ヶ根地区と岡瀬沢地区では、白地地域に住宅整備が進展するなか、リニア中央新幹線整備とそれに伴う建設道路整備が進みつつあり、当地区の魅力的景観資源が喪失の危機に晒されている。

そこで本研究では、土々ヶ根・岡瀬沢地区を対象とし、その地区住民意識調査から当地区における生活領域の特徴を捉えるとともに、その領域内外の景観資源と課題点およびその改善方策を導いた。

Key Words : Oi-cho, Landscape Planning, Life Field, Landscape Resources

1. 背景および目的

岐阜県恵那市の北部に位置する大井町では、恵那市景観計画（2012年3月策定）の方針にある地域の個性を活かすための地域別景観計画の策定に向け、現在筆者らの参画のもと、景観まちづくり活動を進めている¹⁾。特にこの大井町を構成する土々ヶ根地区と岡瀬沢地区では、白地地域に住宅整備が進展するなか、リニア中央新幹線整備とそれに伴う建設道路整備が進みつつあり、当地区の魅力的景観資源が喪失の危機に晒されている。

しかし、その景観保全策や良好な景観形成を図るにあたり、当地区は観光資源や交通ターミナル等の中心的施設が存在しないため、住民共通の景観価値や議論の中心とすべき拠点（生活領域）などが不明瞭といった現状問題も有している。

そこで本研究では、岐阜県恵那市大井町土々ヶ根・岡瀬沢地区を対象（図-1）とし、その地区住民の視点から当地区における生活領域の特徴を捉えるとともに、その領域内外の景観資源を明らかにし、当地区の現状の整備方針を通じて、課題点およびその改善方策を導くことを目的とする。

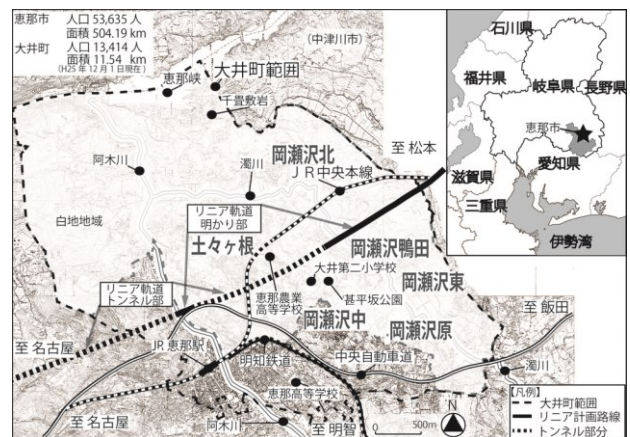


図-1 研究対象地（恵那市大井町）

2. 研究方法

本研究では、前述のように当地区を象徴するような中心的施設が存在しないことから地区住民の日常生活の視点を重視し、特に地区住民の身近な生活領域（以下、「生活領域」と景観資源との関係を捉えるため、筆者らが参画する本市主催の「土々ヶ根・岡瀬沢地区景観まちづくりワークショップ（以下、WS）」および「岡瀬

表-1 調査・分析方法

調査方法	調査内容および分析方法
WS参加者へのヒアリング調査 (12名) 2013年8月31日(土) リニア中央新幹線軌道整備とその建設道路整備および白地地域の住宅地開発の進展を背景に、当地区の今後の良好な景観形成を目的とした景観まちづくりに関心の高い住民によるワークショップ。	①「生活領域」の範囲 被験者に1/5000の白図を配布し、各々の「生活領域」について「あなたにとって身近に感じる範囲はどこか」という設問により、地図上に自身で範囲付けをしてもらい、その理由を別紙に記述してもらう。 ⇒50mメッシュを用いて各回答者の「生活領域」のメッシュ数を算出し、領域ごとの規模を算定する。 また各領域図を重ね合わせることで、生活領域の集合箇所を把握する。
「岡瀬沢リニア委員会」住民代表へのヒアリング調査 (12名) 2013年11月23日(土) リニア中央新幹線軌道整備とその建設道路整備を背景に、当地区の今後の望ましい住環境形成の議論を目的としたまちづくりに関心の高い地区住民による委員会。	②「生活領域」の認知点 自らの「生活領域」の認知点となる場所と名称を捉えるために、「あなたにとって身近に感じる範囲の出入り口と思う場所や事物はどこか」という設問により、①の地図上に当該箇所を記入してもらう。 ⇒認知点の地理的位置と地形的特徴を把握する。
	③好ましい視対象とその視点場 好ましい視対象・視点場を捉えるために「あなたにとって好ましいと感じる風景とそれを眺める場所はどこか」という設問より、①の地図上に当該箇所を布置してもらう。 ⇒好ましい視対象の地理的位置を把握し、各視対象・視点場と「生活領域」との位置関係を考察する。
	④好ましくない視対象とその視点場 好ましくない視対象・視点場を捉えるために「あなたにとって好ましくないと感じる風景とそれを眺める場所はどこか」という設問より、①の地図上に当該箇所を布置してもらう。 ⇒好ましくない視対象の地理的位置を把握し、各視対象・視点場と「生活領域」との位置関係から当地区における課題点を考察する。

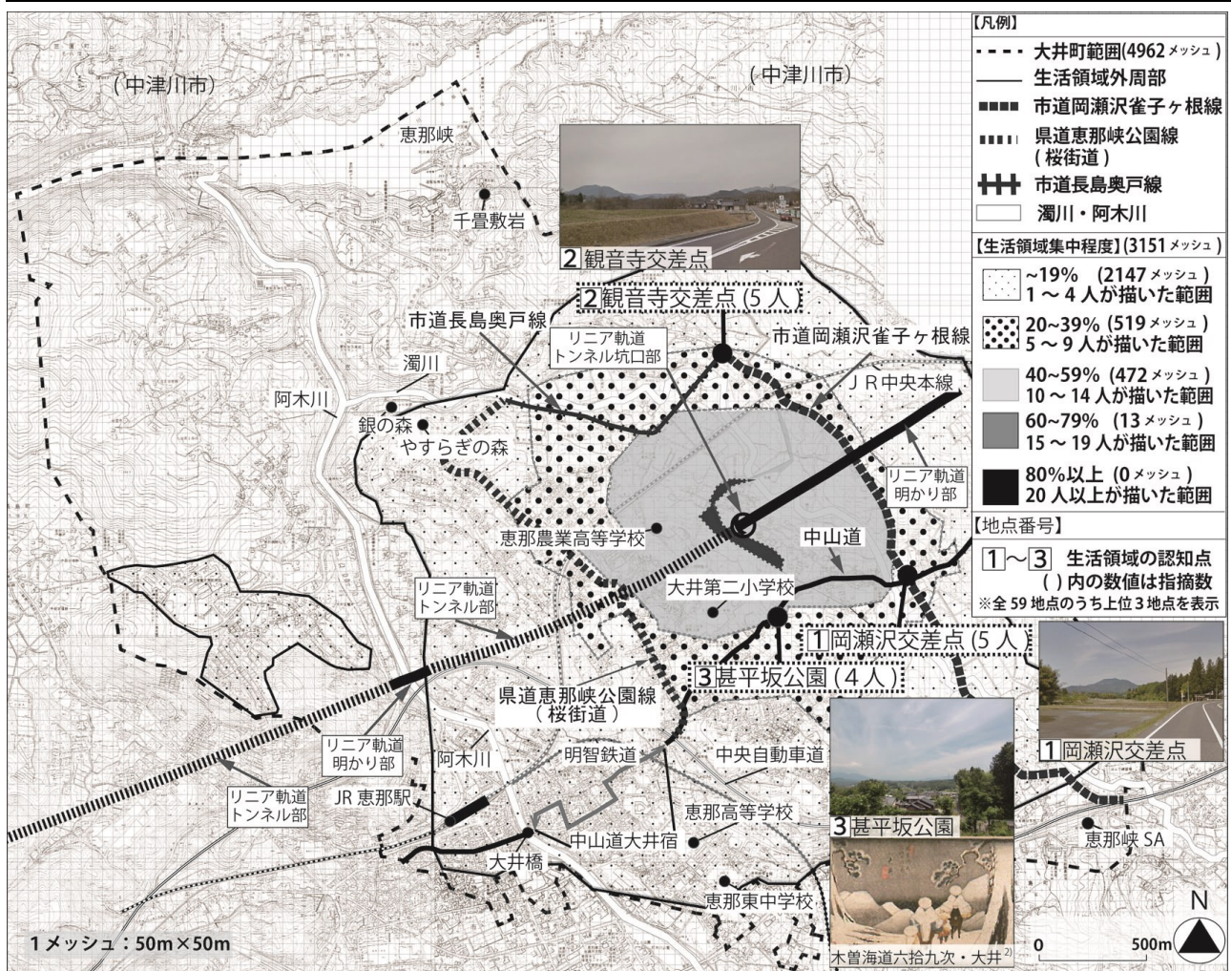


図-2 回答者の「生活領域」の重ね合わせ結果および「生活領域」の認知点(上位3地点)

沢リニア委員会」に参加する当地区のまちづくりに関心の高い住民代表らを対象に、表-1に示す意識調査を実施する。なお本研究では、上述した目的を達成するにあたり、(1)「生活領域」、(2)視対象・視点場と「生活領域」の関係および(3)これらの成果と当地区の整備方針から見た課題点という3つの分析を行う。

3. 結果および考察

(1) 「生活領域」

表-1の調査により、回答者全24名が範囲付けした「生活領域」の重ね合わせ図および、「生活領域」を認知する場所(認知点)を示した分布図を図-2に示す。

a) 「生活領域」の特徴

図-2において4割以上の指摘で重なる領域をみると、北側は「濁川」沿いの「市道長島奥戸線」の周辺部、西側は「県道恵那峡公園線（桜街道）」沿線部、東側は「市道岡瀬沢雀子ヶ根線」沿線部、南側は「中山道」沿線部であることがわかる。これより、回答者は大井町の高台部を取り巻く環状をなす4路線の内側を「生活領域」とする一方、大井町を象徴する中山道大井宿や恵那峡までは含めず、それらとは独立して「生活領域」を意識している実態が捉えられた。

続いて6割以上の指摘で重なる領域をみると、リニア中央新幹線トンネル坑口部付近と栗畑や水田が広がるエリアに集中していることを捉えた。その要因は、土ヶ根地区の高台部を「生活領域」とする住民と、岡瀬沢地区の低地部を「生活領域」とする住民の両者の範囲が重なるためである。これより、当該領域周辺部は両地区の共有空間であるといえ、拠点性を高めるべき場所のひとつと考えられる。

b) 「生活領域」の認知点の特徴

「生活領域」の認知点は全59地点挙げたが、このうち上位3地点は、図-2に示す「**1**岡瀬沢交差点」（指摘数5人）、「**2**観音寺交差点」（5人）、「**3**甚平坂公園」（4人）であった。これらの特徴は、4割以上の「生活領域」の外周部の東部・北部・南部に分布する。領域東部の「**1**岡瀬沢交差点」は近世より主要な街道として繁栄した中山道入口に面する交差点であるとともに、低平地が広がるために遠景の山並みを望む地点として優れていることから認知されやすいと考えられる。北部の「**2**観音寺交差点」は、眺望が良好な微高地の頂部となっていることが印象づけていると考える。南部の「**3**甚平坂公園」は当地区の最高地点に近接し岡瀬沢地区を見渡すことのできる眺望点であるほか、歌川広重が描写した「木曾海道六拾九次・大井」と同じ構図が視認できる場所として親しまれ、知名度も高いこと²が要因と考えられる。これらより3地点は、共通して山並みへの印象深い眺望が得られることを要因として、「生活領域」の重要な認知点となっていることが把握できた。

（2）視対象・視点場と「生活領域」の関係

表-1より示したWSに参加した地区住民（12名）と非参加の「岡瀬沢リニア委員会」の住民代表ら（12名）が挙げた「好ましい」視対象と「好ましくない」視対象の共通項を比較し、指摘傾向や視対象の特徴、およびそれらと前項で抽出した地区住民の「生活領域」との位置関係などについて分析を行う。さらに「好ましい」視対象については、視線方向や視知覚特性を捉え、その結果と当地区の現状の整備方針を通じて課題点を導く。

a) 視対象の特徴

表-2はWSの学習内容の有無に関わらず、WSの参加者・非参加者が共通して挙げる「好ましい」「好ましくない」視対象を捉えるために、両者共通の視対象とそれらの指摘数および視点場の合計数を、また、図-3は表-2の視対象と視点場の分布状況および前項で抽出した「生活領域」を示したものである。

表-2より、「好ましい」視対象としてWS参加者と非参加者の共通項は、全10ヶ所挙げられた。「好ましい」として、半数以上の指摘があった上位視対象は、「①恵那山」「②大井町中心街」「③笠置山」「④御嶽山」の4ヶ所であった。これらはいずれも遠景の眺望対象であり、複数の多様な視点場から視認されていることで共通する（図-3）。当地区が高台であるとともに、現状では高さのある施設・構造物がほとんど存在しないため、開けた眺望に恵まれている様子が伺える。

続いて、表-2においてWS参加者と非参加者の「好ましい」視対象を比較すると、上位4視対象は順位にさほど変化は見られなかったが、「⑤中央本線」においては順位に変化が生じている。これは、WSの中で中央本線の魅力が、路線と山並み・街並みを一度に見通せる俯瞰景（写真-1）であることをWS参加住民のみが学習したためと考えられる。

b) 視対象・視点場と「生活領域」の関係

表-2、図-3より、前項で抽出した4割以上の指摘で重なる「生活領域」に含まれる視対象として、「好ましい」ものは全10ヶ所のうち「⑤中央本線」（両方の指摘数合計7人）、「⑨富士浅間神社」（6人）の2ヶ所のみであった。これらは全体の半数に満たないながらも身近な「生活領域」内に含まれることから、その価値の共有化を促すべきであろう。また、「好ましくない」視対象では「**1**濁川」の1ヶ所にとどまった。現在、整備が不十分であるため人が入れない濁川であるが、かつては、大井町住民の身近な水辺として存在していた。このため、指摘された理由として「昔の姿を取り戻してほしい」という意見も見られたことから、今後は、「生活領域」内の住民を中心に再生に向けた取り組みが望まれる。

一方、「生活領域」に含まれる視点場は14ヶ所と視対象よりも多く、大部分が領域外を一望するものであることから、「生活領域」内では遠景の眺望に価値が置かれているといえよう。

c) 視対象の視知覚特性分析

前述した「好ましい」視対象のうち上位3視対象の「①恵那山」「②大井町中心街」「③笠置山」に着目し、これらの視角と視距離を示したものを図-4に示す。これより「①恵那山」「③笠置山」に対する仰角は5～7度を

表-2 WSの参加者・非参加者が共通してあげる視対象とそれらの視点場

好ましい視対象（共通項）※○数字は図3のものに対応					
WS参加者			WS非参加者（岡瀬リニア委員会）		
視対象名	指摘数 [人]	視点場 [合計数]	視対象名	指摘数 [人]	視点場 [合計数]
1 ①恵那山	9	9ヶ所	1 ①恵那山	9	8ヶ所
2 ②大井町中心街	9	8ヶ所	2 ③笠置山	8	8ヶ所
3 ③笠置山	8	10ヶ所	3 ②大井町中心街	8	7ヶ所
4 ④御嶽山	6	6ヶ所	4 ④御嶽山	7	5ヶ所
5 ⑤中央本線	5	2ヶ所	5 ⑥恵那峡	4	3ヶ所
6 ⑥恵那峡	4	3ヶ所	6 ⑧田園風景（岡瀬沢）	4	2ヶ所
7 ⑦濁川	3	2ヶ所	7 ⑦濁川	3	1ヶ所
8 ⑧田園風景（岡瀬沢）	3	2ヶ所	8 ⑨富士浅間神社	3	2ヶ所
9 ⑨富士浅間神社	3	1ヶ所	9 ⑤中央本線	2	2ヶ所
10 ⑩観音寺溜池	2	1ヶ所	10 ⑩観音寺溜池	1	1ヶ所

好ましくない視対象（共通項）※△数字は図3のものに対応					
WS参加者			WS非参加者（岡瀬リニア委員会）		
視対象名	指摘数 [人]	視点場 [合計数]	視対象名	指摘数 [人]	視点場 [合計数]
1 △1 濁川	2	1ヶ所	1 △1 濁川	3	3ヶ所
2 △2 パチンコ店	1	1ヶ所	2 △2 パチンコ店	2	2ヶ所
3 △3 桜街道	1	1ヶ所	3 △3 桜街道	1	2ヶ所
4 △4 雑木林	1	1ヶ所	4 △4 雑木林	1	1ヶ所



写真-1 JR中央本線(上:山並み背景, 下:街並み背景)

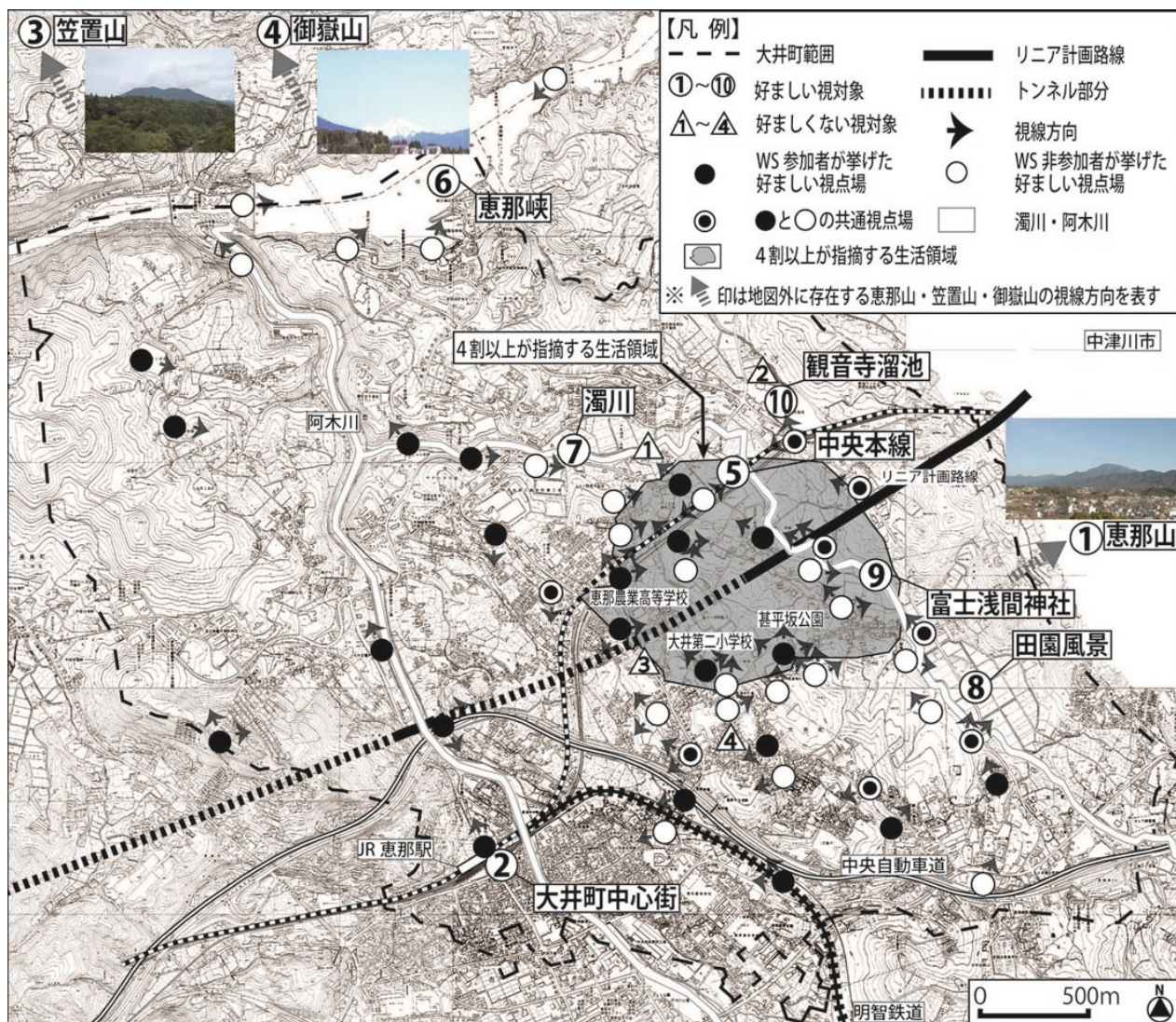


図-3 視対象・視点場の分布と「生活領域」との関係

得た。一般に山の仰角として5~12度の範囲は、山腹にも興味をもて、山容全体を容易に見渡すのに望ましいとされている³⁾。このことより「①恵那山」「③笠置山」は、当地区において優れた山並みとして眺められる現状が認識できる。また、「②大井町中心街」は俯角が2~3度と俯瞰の遠景領域（緩やかな俯角）にあることより、特定の事物でなく、中心街の広がりをも漠然と鑑賞する意識が働いていると考えられよう⁴⁾。

（3）これらの成果と当地区の整備方針から見た課題点

2013年9月に公表されたリニア中央新幹線整備に着目すると、図4より遠景の眺望対象である「①恵那山」

「③笠置山」に関しては、視点場の半数以上が計画路線周辺に分布していることから、現在の視点場はリニア中央新幹線の路線構造物により不可視な領域が生まれ、山並みを視界に収めることが困難になる可能性が危惧される。また、「②大井町中心街」の俯瞰景に関しては路線構造物による影響は少ないが、建設道路整備に伴う視点場の消失が危惧される。さらに、今回挙げられた視点場の大部分は白地地域に存在することから、今後の住宅整備によっても視点場の消失が懸念される。

4. まとめ

以上より、大井町のJR恵那駅や中山道大井宿を有する中心市街地とは異なり、土々根・岡瀬沢地区は拠点に乏しいとされていたが、本調査から、良好な眺望で共通する「①岡瀬沢交差点」、「②観音寺交差点」および「③甚平坂公園」の3地点が「生活領域」を形成する上で重要な認知点になるとともに、環状をなす4路線で囲まれる高台空間を「生活領域」として、その中心部はリニア中央新幹線トンネル坑口周辺となることが明らかとなった。これより、環状をなす4路線を当地区のコミュニティ道路と位置づけつつ、眺望の良い当該トンネル坑口上部は、両地区にとっての重要なコミュニティスペースとして活用する手立てが求められよう。

一方、当地区における魅力的景観資源は抽出できたが、リニア中央新幹線軌道整備をはじめとする新規計画が影響し、視点場消失や視線断絶による眺望阻害の危険性があることを示した。これより、今後の展開としては、現状の計画・整備を不用意に否定するのではなく、魅力的景観資源との折り合いを考えた景観保全・創造策を検討していく必要があると認識する。

謝辞：本研究はJSPS科研費21340043(代表：早稲田大学・佐々木葉)の助成を受けたものです。

参考文献

- 1)恵那市：恵那市景観計画，20123。2)恵那市教育委員会：恵那街道歩記，20073。3)樋口忠彦：景観の構造，技報堂，pp.50-63，1975.10。
4)篠原修編：景観用語辞典，彰国社，pp.46-47，1998.11

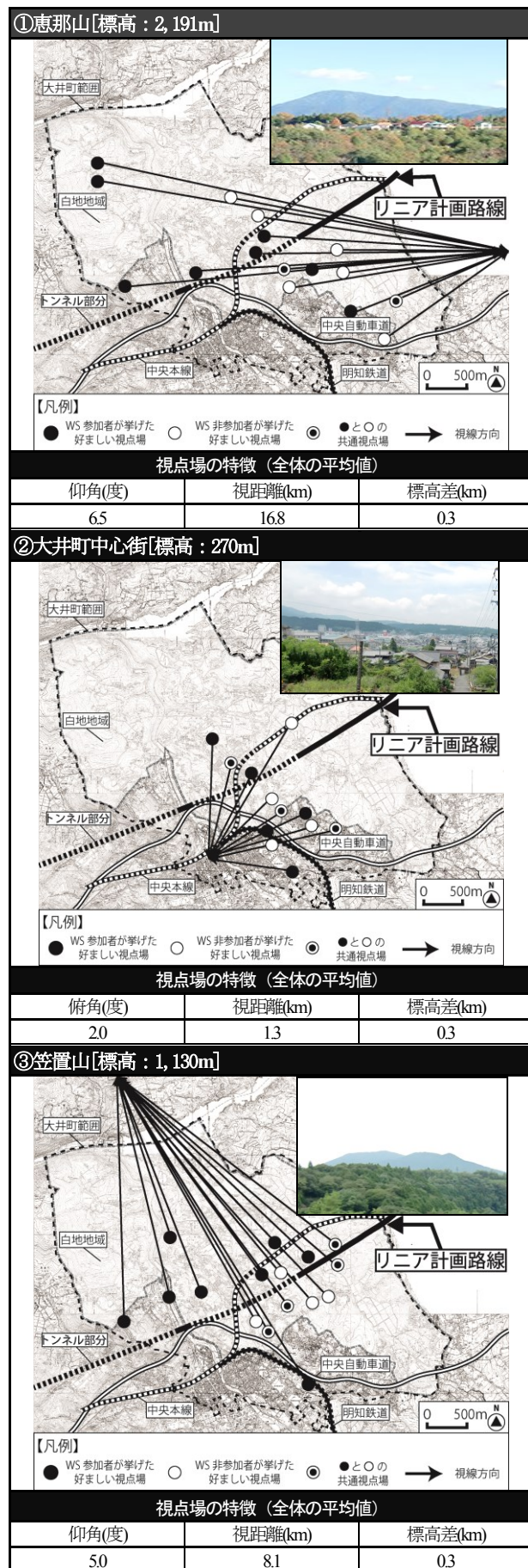


図4 「好ましい」とする上位3視対象についての視知覚特性と視点場分布